

「係り結びの法則」の指導

豊 永 徳

市販の高等学校用「古典文法」のテキストは、「係り結びの法則」について、次のように説明しているのが一般である。

「文は文末を終止形で結ぶのが普通である。しかし、文中に係助詞『ぞ』『なむ』『こそ』『や』『か』があるときは、それを受け文末の活用語は、次のような特別な結び方をする。このまわりを『係り結びの法則』という。

ぞ・なむ (強調)

や・か (疑問・反語)

……連体形

こそ (強調) …………… 已然形

ただし次のような場合があるのでよく注意しなければならない。〔注〕として、引用文中の係り結び、結びの省略、結びの消去等の場合をあげて説明してある。

説明はゆきとどいてゐる。にもかかわらず生徒の理解は容易に得られない。例えば、

歌詠みのかたこそ元輔が女にて、さばかりなりける程よりはすぐれざりけるとかやと覚ゆる。(無名草子・清少納言)
における「こそ」の結び、あるいは、これほどではなくても、「係

り結び」のほとんどの形が出てくる、

同じ心ならんと、しめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなき事も、うらなくいひ慰まんこそうれしかるべきに、さる人あるまじければ、露連はざらんと向ひあたらんは、ひとりあるこ、ちやせん。

五に言はんほどの事をば、「げに」と聞くかひあるものから、いさゝか違ふ所もあらんこそぞ、「我はさやは思ふ」など争ひ憎み、「さるから、さぞ」ともうち語らばば、つれんゝ慰まめと思へど、げには、少しかこつかたも、我と等しからざらん人は、大方のよしなしこと言はんほどこそあらめ、まめやかなの心の友には、はるかにへだゝる所のありぬべきぞ、わびしきや。

(徒然草・第十二段)

における「係り結び」を考察してみると、生徒にとって「係り結びの法則」は、かなり理解困難なものであることがわかる。係助詞は発見できても、結びの語が発見できないのである。「それを受ける文末の活用語」が問題なのである。

従って、「係り結びの法則」の指導の第一歩は「それを受ける文末の活用語」の理解から始めねばならない。「係り」といい、「結び」というからには、両者の関係を整理して理解に導くことが肝要

○しらゆきのふりてつもれる山ざとはすむ人さへや思ひきゆらん
(三二八)

「保り」と「結び」とが、主語・述語の関係を構成するとき、係助詞を伴う主語文節の中心は、体言または連体形である。「副助詞＋係助詞」の場合も、副助詞がついている語は、体言または連体形である。

2 連用修飾語・被修飾語の関係

連用修飾語

被修飾語

(1) 副詞＋係助詞

結びを含む文節

○おもへども人めつゝみのたかければ川と見ながらえこそわたらね
(六五九)

○我いほは宮このたつみしかぞすむ世をうち山と人はいふなり
(九八三)

○つかひのかへりきて、さなむありつるといひければ、……
(八七四・詞)

○ふみわけて更にやとはむもみちほのふりかくしてし道とみながら
(二八八)

○わがやどの池の藤なみさきにけり山郭公いつかきなかむ
(一三五)

(2) 連用修飾語

被修飾語

連用形＋係助詞

結びを含む文節

○けぬがうへに又もふりしけはるがすみたちなばみゆきまれにこそ
みめ (三三三)

○をりてみばおちぞしめべき秋はぎの枝もたわゝにおけるしら露
(二二三)

○かの家のあるじ、かくさだかになんやどりはあると、いひいだして
侍りければ (四二・詞)

○もろともになきてとどめよきりぎりす秋のわかれはをしくやはあ
らぬ (三八五)

(3) 連用修飾語

被修飾語

格助詞＋係助詞

結びを含む文節

△格助詞「を」＋係助詞▽

○よるべなみ身をこそとほくへだてつれ心は君が影となりなき
(六一九)

○けふよりは今こむ年の昨日をぞいつしかとのみまぢわたるべき
(一八三)

○むかしのてにてこのうたをなんかきつたりける。(八五七・
詞)

○年をへて花のかぐみとなる水はちりかゝるをやくもるといふらむ
(四四)

○たれをかもしる人にせんたかさこのまつもむかしの友ならなくに
(九〇九)

△格助詞「に」＋係助詞▽

○そこひなきふちはさわぐ山河のあさきせにこそあだ浪はたて
(七二二)

○あききぬとめにはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

(一六九)

○む月のとをかあまりになん、ほかへかくれにける。(七四七・詞)

○風ふけばおきつしらなみたつた山よはにや君がひとりこゆらん(九九四)

○きみならで誰にかみせん梅花色をもかをもしる人ぞしる(三三八)
△格助詞「と」+係助詞▽

○秋はぎの花をば雨にぬらせども君をばましてをしとこそおもへ(三九七)

○紫のひとつとゆゑにむさし野の草はみながらあはれとぞみる(八六七)

○よるになりて月のいとおもしろくさいでたりけるをみて、よめるとなむかたりつたふる。(四〇六・詞)

○年の内に春はきけにけりひと、せをこそとやいはんことしとやいはん(一)

○雪とのみふるだにあるをさくら花いかにちれとか風のふくらん(八六)

△格助詞「より」+係助詞▽
○冬ながら春のとりのちかければながきよりぞ花はちりける(一〇二)

○あきはぎのしたばいろづく今よりやひとりある人のいねがてにする(一二〇)

○世中はむかしよりやはうかりけんわが身ひとつのためになれるか(九四八)

連用修飾語

被修飾語

(4) 接続助詞+係助詞

結びを含む文節

△接続助詞「て」+係助詞▽

○夕づくよおほつかなきをたまくしげふたみの浦はあけてこそ見め(四一七)

○月夜にはそれとも見えず梅花かをたづねてぞしるべかりける(四〇)

○これよりさきの哥をあつてなむ万えうしふとなづけられたりける(序)

○今はとてきみがかれなば我やどの花をばひとりみてやしのぼん(八〇〇)

○たがさとによがれをしてか郭公たぶこゝにしもねたる声する(七一〇)

△接続助詞「で」+係助詞▽

○あかてこそおもはんかははなれなめそをだに後のわすれがたみに(七一七)

○北へゆくかりぞなくなるつれてこしかずはたらでぞかへるべらなる(四一二)

△接続助詞「ば」+係助詞▽
(仮定条件)

○みなせがはありてゆく水なくばこそつひにわが身をたえぬとおもはめ(七九三)
○心あてにをらばやをらんはつしものおきまとはせるしらすぐの花

(一七七)

○いかならんいはほのなかにすまはかは世のうきことのきこえこそ
らむ (九五二)

(確定条件)

○あきの露いろいろにおけばこそ山のこのはちぐさなるらめ
(二五九)

○君をおもひおきつのはまになくたづの尋ねくればぞありとだにき
く (九一四)

○思ひつゝぬればや人のみえつらん夢としりせばさめざらましを
(五五二)

○たがための縮なればか秋ぎりのさほの山へをたちかくすらむ
(二六五)

△接続助詞「つつ」+係助詞▽
○ぬれつゝぞしひてをりつる年のうちに春はいくかもあらじと思へ
ば (一三三)

△接続助詞「ものから」+係助詞▽
○心をぞわりなき物と思ひぬるみる物からやこひしかるべき
八五)

連用修飾語

副助詞+係助詞

被修飾語

結びを含む文節

△副助詞「のみ」+係助詞▽

○こまなめていさみにゆかむふるさとは雪とのみこそ花はちるらめ
(一一二)

○あしひきの山ほとゝぎすをりはへてたれかまさるとねをのみぞな
く (一五〇)

○春のあしたよしのゝ山のさくらは、人まろが心には雲かとのみな
むおほえりる。(序)

○見てのみや人にかたらむさくら花てごとをりていへづとにせん
(五五)

△副助詞「し」+係助詞▽
○あたらしき年の始めにかくしこそちとせをかねてたのしきをつめ
(一〇六九)

○唐衣きつゝなれにしつましあればはるきぬるたびをしぞおも
ふ (四一〇)

○あづまぢのさやのなか山中々になにしか人を思ひそめけん (五
九四)

△副助詞「まで」+係助詞▽
○ありぬやと心みがてら逢ひみねばたはぶれにくきまでぞこひしき
(一〇二五)

○いつまでか野辺に心のあくがれむ花しちらずは千世もへぬべし
(九六)

△副助詞「さへ」+係助詞▽
○すみのえのきしによる浪よるさへやゆめのかよひぢ人めよくらん
(五五九)

△副助詞「だに」+係助詞▽

○野とならばうつらとなきて年はへんかりにだにやは君はこざらむ
(九七二)

連用修飾語

係助詞 + 係助詞

結びを含む文節

(6)

△係助詞「も」 + 係助詞▽

○こよひこむ人にはあはじ七夕のひさしき程にまちもこそすれ

(一八一)

○うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをもるとみるがわびしさ

(六五六)

○ひとめみしきみもやくるとさくら花けふはまちみてちらばちらなん南

(七八)

○いまもかもさきにはふらむたち花のこじまのさきの山吹の花

(一一一)

連用修飾語

被修飾語

体言 + 係助詞

結びを含む文節

(7)

○みる人もなき山ざとのさくら花外のちりなん後ぞさかまし

八

○秋のの道もまどひぬまつむしのこゑする方にやどやからまし

(二〇一)

連用修飾語

被修飾語

接尾語 + 係助詞

結びを含む文節

(8)

○枕よりあとよりこひのせめくればせんかたなみぞとこなかにをる

(二〇三三)

「係り」と「結び」とが、連用修飾語・被修飾語の関係を構成するとき、係助詞を伴う連用修飾語文節は、副詞・連用形・格助詞)

連用格)・接統助詞・副助詞・係助詞(も)・体言・接尾語に係助詞がついた形としてあらわれている。

引用を示す格助詞「と」に係助詞がつく場合は、引用の部分全体が連用修飾語の連文節として、結びを含む文節(連文節)にかかるとに留意しなければならない。

また、副助詞・係助詞「も」に係助詞がつく場合は、微妙な心中の表現になることが多いので、解釈、鑑賞上特に注意することが肝要であろう。

体言に係助詞を伴う場合は、体言の下に連用格の格助詞の省略があると見てよいであろう。

3 被補助語・補助語の関係

被補助語

補助語

被補助語 + 係助詞

結びを含む文節

○おしひきの山たちはなれゆくくものやどりさだめ世にこそ有りけれ (四三〇)

○世中の人の心は花ぞめのうつろひやすき色にぞ有りける (七九五)

○冬ながらそらより花のちりくるはくものあなたははるにやあるらむ (三三〇)

○わびしらにましらななきをあしひきの山のかひあるけふにやはあらぬ (二〇六七)

「係り」と「結び」とが、被補助語・補助語の関係にあるとき、その多くは「……は」を主部とする述部としてあらわれるようであ

る。

指導上は、断定の助動詞「なり」が「に十あり」の構造であることとを基本において、例えば「世にこそありけれ」は「世なりけり」を強調したものであると理解させるのがよいであろう。

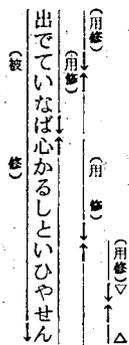
また、この形は、散文では挿入句や、結びを省略した形であられることが多い。結びが省略された場合、結びの基本は「ある」であるが、前後の叙述を検討して、「侍る」「あらむ」「あるらむ」「ありけむ」などの結びを考えさせることを習慣づけたい。

三

古今和歌集中の「係り結び」を、文節間の関係で見ると、そのすべてが、前述の三つの関係に分類できる。(注3)

「係り結びの法則」の指導にあたって、私の取ってきた方法は、「係り結び」を文節間の関係としてとらえる方法である。

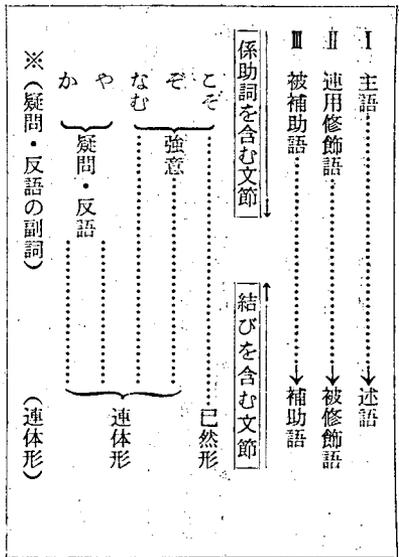
- 1 文法指導の最後に扱う。
- 2 既習の古文教材から、係助詞を含む文をすべて抜き出し、係助詞の種類に分類させる。
- 3 文節間の関係を次のように図示させる。(▽は係り、△は結びの記号である。)



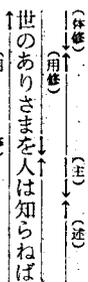
- 1 結びが省略されることがある。

被補助語 (ありけむ△)
補助語

- 2 ○いづれの御時に、女御更衣……
結びが解消されることがある。



- 4 「係助詞を含む文節」と「結びの語を含む文節」との関係进行分类させる。その際、口語訳もそえておく。
- 5 係り結びについて、その法則性をまとめさせる。まとめは次のようになる。



主語

述語（「思ふ」↓接助「て」を伴い解消）

○人々なむ別れがたく思ひて、しきりにとかくしつづののしるうち夜ふけぬ。

3 「にや」・「にか」（断定「なり」の連用形+や・か）|| 疑問の意になることが多い。

4 「やは」・「かは」|| 反語の意になることが多い。

5 「こそ……已然形」の形で文が終せず下に続くときは、逆接の意となって、以下を強調する。

6 「もこそ……已然形」・「もぞ……連体形」の場合は、懸念、心配（……スルト困ル、……スルトイケナイ）の意味になることが多い。

7 「なむ」はやわらかみのある表現で、会話文に多く、和歌には少ない。伊勢・竹取などでは地の文にも多く「なむ……ける」が基本になっている。

8 「か」は、疑問の意味をあらわす副詞や代名詞に伴って使われることが多い。

9 「ぞ」が文末につくと、強く指示する性質から、終助詞的なはたらきをする。

○うまし国ぞ。……ヨイ国デアルナ（詠嘆）

○親は一人やはある。などかくはあるぞ。……ドウシテコウ悲シムノテアルカ（疑問・疑問副詞と呼応する。）

10 呼びかけを示す接尾語の「こそ」と混同しないこと。

○北殿こそ聞き給ふや。……北隣サン、聞イテオイデカ。

四

文法学習における「係り結びの法則」の指導は、これを文節間の関係の中に位置づけ、文構造を説明する一つの方法として扱った方が、「それを受ける文末の活用語」すなわち「結び」が明確に把握できる。とりわけ、「結び」の省略、解消（消去）の場合、文章全体の中から自信を持って対処できるようにする。

しかし、「係り結びの法則」の指導は、これを以て終りとはならない。「係り結びの法則」に限らず、文法指導のすべでは、古人の物の見方、考え方、感じ方、つまりは、古人の生きざまを体験しつづ、現代に生きる生き方にまで考えを発展せしめる古典指導の一手段にすぎない。文法の知識を単なる知識として終らせてはならない。

例えば、「徒然草第十二段」（前述）を扱うとき、「係り結び」を指摘するだけに終ってはなるまい。この文章は、とりわけ、文法の知識を活用することで、作者兼好に迫ることのできる文章である。

私は、この文章を指導するとき、次のような点に留意している。

1 全文の音読と口語訳。

2 「係り結び」の指摘。文節間の関係を明らかにし、口語訳がそれに応じているかの再確認。

3 助動詞「む」の検討。

仮定の助動詞の多用は何を意味するか。

兼好の友人論は仮定の友人論である。わけて、「同じ心ならん

人」「まめやかかの心の友」は、現代においても、仮定的仮想的人物ではないか。

4 文章が二文から成っていることを確認したうえで「係り結び」の果たしているのはたらきの検討。

前後それぞれの文の、最も大きい曲り角はどこか。

前文では「言ひ慰まんこそうれしかるべきに」、後の文では、「大方のよしなしごと言はんほどこそあらめ」の部分である。いずれも逆接で、前者の結びは逆接の接続助詞を伴って解消、後者は逆接強調法の「係り結び」である。二つながら、「こそ」で受けとめられている連文節の内容は、友人を仮想しての明るい見通しである。それが、「結び」と応じて逆接の意となり、それを受けける内容は、「ひとりあるこゝちやせん」「まめやかかの心の友にははるかにへだゝる所のありぬべきぞ、わびしきや」と暗く絶望的な嘆息になっている。

「いささか違ふ所あらん人こそ」は、「つれづれ慰まめ」にかかる「と思へど」の内容である。「我はさやは思ふ」「さるから、さぞ」は、「つれづれ慰まむ」想像上（「うち語らばば」とある）の情景を印象づける表現になっている。これらはすべて「と」で受けとめられ、さらに「思へど」と逆接になって、わずかな明るさも否定されて行くことになる。

作者兼好の「同じ心ならん人」「まめやかかの心の友」を得ようとして得られないことへの嘆きが行間ににじみ出ていると言おうべきであろう。

二つの文法上の知識(注)を用いただけで、この文章に対する生

徒の共感は、極めて深いものになる。現代の若者もまた「同じ心ならん人」「まめやかかの心の友」を求めつつ、求め得ずに悩むことは多いのである。

「係り結びの法則」の指導は、まず、文節間の関係の中に位置づけて、「結び」を明確に把握させることである。ついで、「係り結び」の表現にこめられた作者の心情や表現意図を汲むことへと進むべきであろう。かくして、「民族の祖先のすぐれた人間記録としての古典に表現されている人間典型(それぞれの時代・社会において行動し感動し思索した人間典型)にじかに触れることによって、人生や社会や自然や歴史などについての認識を深め、現代における生き方につちかう」という「古典教育の中核目標」へ迫ることが可能になると考える。(注)

注

1 古典解釈「文語文法」(角川書店)六八ページ

2 日本古典文学大系「古今和歌集」(岩波書店)による。考察の対象は、短歌を中心とし、係助詞「なむ」は、かな序や詞書によった。文節間の関係は→↑で示し、連文節間の関係は省略した。

3 付表参照。

4 「徒然草全注釈」(安良岡康作)参照。

5 熊沢龍・中西昇・野地潤家編「国語科教育法」六二ページ

(長崎・青雲高等学校教諭)

表

分類	種別	主語文節		述詞		修飾		助詞		終止		終止		種別	種別			
		主語	述詞	修飾	助詞	終止	終止	終止	終止	終止	終止							
二	文	32, 33, 41, 183, 173, 177, 214	168	44	213	119	412	717	790	239	111	60	1025	299	24	48	204, 212	
		314, 261, 235, 237, 209, 291	497	172	333	186	159	167	713	299	227	276	914	914	34	49	274, 275	
		304, 479, 434, 465, 410, 744	581	470	437	487	487	487	795	487	487	487	487	487	487	487	487	777, 819
		308, 474, 774, 825, 819, 822	529	443	443	443	443	443	443	443	443	443	443	443	443	443	443	845, 854
		405, 723, 839, 944, 947, 951	466	482	482	482	482	482	482	482	482	482	482	482	482	482	482	927, 979
		425, 1043, 1041	971	971	971	971	971	971	971	971	971	971	971	971	971	971	971	1042
			2017	2017	2017	2017	2017	2017	2017	2017	2017	2017	2017	2017	2017	2017	2017	
			1016	1016	1016	1016	1016	1016	1016	1016	1016	1016	1016	1016	1016	1016	1016	
三	文	9, 15, 25, 26, 38, 62, 64, 67, 67	168	44	213	119	412	717	790	239	111	60	1025	299	24	48	204, 212	
		12, 21, 89, 103, 105, 106, 119, 139	404	170	170	170	170	170	170	170	170	170	170	170	170	170	274, 275	
		178, 179, 182, 197, 497, 494, 200	443	213	213	213	213	213	213	213	213	213	213	213	213	213	777, 819	
		307, 218, 212, 252, 284, 310, 314	437	437	437	437	437	437	437	437	437	437	437	437	437	437	845, 854	
		310, 223, 331, 337, 337, 339, 373, 443	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	927, 979	
		327, 323, 342, 349, 412, 413, 448, 449, 450	711	711	711	711	711	711	711	711	711	711	711	711	711	711	1042	
		407, 407, 407, 407, 407, 407, 407, 407	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	
		477, 761, 744, 744, 744, 744, 814, 814	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	
		124, 123, 124, 123, 124, 123, 124, 123	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	
		125, 124, 123, 124, 123, 124, 123, 124	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	1049	
	423	423	423	423	423	423	423	423	423	423	423	423	423	423	423			
四	文	1, 10, 12, 43, 94, 109, 104	329	4	31, 199	46	22, 35	1, 4	277	194	485	55	59	764	74	30	330	
		12, 10, 12, 43, 94, 109, 104	439	87	199, 393	239	211, 312	32, 177	372	372	204	204	204	204	204	204		
		319, 218, 283, 293, 310, 349	799	179	324, 499	444	434, 467	271, 374	443	443	443	443	443	443	443	443		
		319, 377, 423, 445, 449, 449	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412		
		444, 494, 534, 548, 549, 579	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412		
		477, 479, 723, 767, 763, 757	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412		
		872, 874, 873, 1012	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412		
			412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	
			412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	
			412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	412	
五	文	41, 103, 443, 445, 722	41, 82	41, 385	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	395	
		41, 103, 443, 445, 722	41, 82	41, 385	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	844	
		41, 103, 443, 445, 722	41, 82	41, 385	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	1035	
		41, 103, 443, 445, 722	41, 82	41, 385	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	1047	
		41, 103, 443, 445, 722	41, 82	41, 385	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	1047	
		41, 103, 443, 445, 722	41, 82	41, 385	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	1047	
		41, 103, 443, 445, 722	41, 82	41, 385	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	1047	
		41, 103, 443, 445, 722	41, 82	41, 385	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	1047	
		41, 103, 443, 445, 722	41, 82	41, 385	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	1047	
		41, 103, 443, 445, 722	41, 82	41, 385	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	41, 82	1047	

古義文書大家「古今和歌集」の歌番号(1)表。